Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-04-29

修辞的効果を生み出すカテゴリー化 : 日本語における類の提喩の機能的多様性

小松原, 哲太

(Citation)
認知言語学研究,3:23-39

(Issue Date)
2018-03

(Resource Type)
journal article

(Version)
Version of Record

(Rights)
© 2017 日本認知言語学会

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/90008830

修辞的効果を生み出すカテゴリー化
―日本語における類の提喩の機能的多様性―*

小松原哲太（立命館大学）

要旨

本論文の目的は，日本語の類の提喩（i.e. 一般で特殊を表す提喩）を考察対象として，その多様な機能の基盤となる認知的特性を明らかにすることである。修辞的効果は一般に，慣用的な用法から外れている場合に生じることが知られているが，この外れ方にはパターンがある。類の提喩の修辞的効果は，非慣習的な着眼点にもとづく上位レベルのカテゴリー化を反映している。類の提喩は，コンテクストに応じて多様な機能（e.g. 未知性を示唆する，特定の側面を際立たせる，婉曲性を示す，無関心であることを暗示する）を担うが，全ての機能は，類の提喩特有のカテゴリー化のパターンを反映している。本論文では，認知的特性に着目することで，修辞学で断片的に記述されてきたレトリックの効果が体系的に記述されることを例証した。

キーワード

レトリック，提喩，認知文法，前景化／背景化，コンテクスト

1. はじめに

隠喩（metaphor）や換喩（metonymy）などのレトリック（i.e. 修辞）は，認知言語学の中心的な研究トピックの 1 つとして注目されている（e.g. Lakoff & Johnson 1980; Panther & Radden 1999）。レトリックが概念体系や日常経験を秩序立て，言語だけでなく認識や行動に影響を与えるという点に，認知的な意味でのレトリックの重要性がある（Lakoff &

* 本研究は，文部科学省の科学研究費補助金（課題番号：17K13451）の助成を受けて行われている。本論文は，2016 年 10 月に京都大学で行われた京都言語学コロキアムの研究発表がもとになっている。発表の機会を下さった谷口一美先生（京都大学）と京都大学人間・環境学研究科谷口研究室の院生諸氏に感謝申し上げる。また，2017 年 5 月に立命館大学で行われた立命館大学認知科学研究センターの研究会でも，本論文に関連する有意義な議論を行うことができた。研究会を運営されている東山篤規先生（立命館大学）をはじめとした諸先生方，および研究会にお誘い下さった大石衡聴先生（立命館大学）にも心より御礼申し上げたい。最後に，本論文の匿名査読者の方々からは，不備や不明瞭な点のご指摘，また有益なコメントを多数いただいた。ここに記して感謝の意を表したい。

© 2017 年　日本認知言語学会

Johnson 1980: 139–146)。

本論文で論じる提喩（synecdoche）は，カテゴリー化（categorization）という，言語の基盤となる認知能力に深く関係するレトリックである。「提喩」という修辞学用語がカバーする言語現象の範囲を画定することは簡単ではないが，提喩の典型例は，あるカテゴリーの成員一般をその特殊例で表す，あるいは反対に，ある特定の事物をより一般的な類で表す表現である。前者の場合，つまり一般を特殊で表す提喩の例としては，「昼ごはん」における「ごはん」の用い方が挙げられる。「ごはんとおかず」の「ごはん」の意味と比較すると分かるように，ここでは語の適用範囲が文字通りの意味（i.e. 米飯）よりも拡大された意味（i.e. 食べ物一般）で用いられている。また，後者の場合，つまり特殊を一般で表す提喩の例としては，「花見」における「花」の用い方が挙げられる。ここでの「花」は，「花と野菜」のような場合の「花」とは異なり，桜という特殊例だけを表すという点で，文字通りの意味よりも縮小された意味で用いられている。提喩は，言語によるカテゴリー化が固定されたものではなく，柔軟に伸縮することを示す言語現象として注目される。

従来の研究では，提喩とは“何であるか”に関心が寄せられており，提喩の基盤となる能力と解釈のメカニズムの解明を試みる研究が主になされてきた（山梨 1988: 103–111; 森 1998; Seto 1999; 山泉 2005)。これに対して，提喩が“何のために”用いられるのかという機能の問題は，先行研究では断片的な記述がなされているのみで，体系的には論じられていない。提喩の構造は，具体的な使用のコンテクストにおける提喩の機能に動機づけられている。レトリックは広い意味で効果的な言語使用であり，意味が伝達され理解される際に何らかの表現効果を生み出すというレトリックの機能の解明は，レトリック研究の重要課題であると言える。

本論文では，日本語における一般で特殊を表す提喩，つまり抽象化された表現を用いる提喩を考察対象とし，その表現効果を体系的に記述する。提喩は一見すると，いかにもレトリックらしい，奇抜さと印象的な効果からは縁遠いように見える。しかし，文学テクストの用例の中には，特別な表現効果を生み出す（1）のような例も珍しくない。「木村」は，作品中ではほぼ一貫してその姓によって言及されているが，第1文と異なり，第3文では「男」という不特定で一般的な表現によって描写されている。この提喩には，「葉子」が，「木村」という特定の人物の内的感情には無関心であり，単なる「男」の外的特徴を観察しているという，葉子の木村に対する冷静な態度を暗示するレトリックとしての効果が認められる。[1]

[1] 固有名の代わりに同類一般を表す名称を用いる，あるいはその逆を用いる表現は，修辞学で換称（antonomasia）と呼ばれる場合がある（佐藤 1978: 171)。本論文では，佐藤にしたがい，換称を提喩の下位類とみなす。

(1) 木村は自分の感情に打負かされて身を震わしていた。そしてわくわくと流れ出る涙が見る見る眼から溢れて，顔を伝って幾筋となく流れ落ちた。葉子は，その涙の一雫が気まぐれにも，俯向(うつむ)いた男の鼻の先きに宿って，落ちそうで落ちないのを見やっていた。（有島武郎『或る女』: 199）

レトリック研究で機能の問題が深く掘り下げられてこなかった理由の 1 つは，「効果」の内容を直接的に記述しようとすると，個人的な印象論の域を出ないことが多いという点にあると思われる。レトリックの記述は，さまざまなコンテクストにおける多種多様な概念内容に及ぶ。しかし，概念内容が多様であっても，その内容（content）に対する捉え方（construal）にはパターンがある。レトリックの表現効果，すなわち修辞的効果は，レトリックに内在する捉え方のパターンを分析することで，より具体的かつ体系的に記述することが可能である（小松原 2016: 60–68）。本論文では，認知文法のフレームワーク（Langacker 2008）を背景として，修辞的効果をもたらす提喩の捉え方の図式（schema）を明らかにし，多様な修辞的効果を体系的に記述する。

以下では，まず提喩とは何かを明確にし（2 節），提喩が修辞的効果をもつための条件を考察する（3 節）。4 節で，認知言語学の観点から，提喩の捉え方の図式を分析する。5 節では，具体的なコンテクストによってどのように図式が具体化されるかを分析することで，修辞的効果の体系的な記述を試みる。

2. 提喩

提喩（synecdoche）という用語に対応する言語現象の範囲は，歴史的変遷の中で大きく揺らいできた（Nerlich 2010）が，全体（whole）の代わりに部分（part）を，または種（species）の代わりに類（genus）を用いること，あるいはその反対を用いること（Lanham 1991: 148）という定義が，修辞学における提喩の標準的な定義として採用されてきた。

部分全体の提喩は，部分で全体を表す（2a）のような例と，全体で部分を表す（2b）のような例に分けられる。（2a）では「屋根」だけでなく全体としての家の並びが問題になっている。これに対して（2b）では壁や窓などが捨象され，ノックする戸だけが問題になっている。

(2) a. 石畳の並木道には，赤い屋根が並んでいる。
　　b. 職員はお年寄りの家を，一軒一軒ノックして回った。
(3) a. 片栗粉を使ってもちもちのわらび餅を作ることができます。
　　b. 夕食後には必ず甘いものを食べます。

同様に，類種の提喩は，種で類を表す（3a）のような例と，類で種を表す（3b）のような

例に分けられる。ここでいう類と種とは，一般的な分類と特定の事例という程の意味である。(3a) のように，「わらび餅」はデンプンと水，砂糖から作る和菓子の総称として用いることができるが，厳密にはわらび粉を用いるものが本来のわらび餅である。(3b) の「甘いもの」は菓子類だけを指しており，「甘いもの」と苦いものを対比する場合とは異なり，砂糖やみりんなど，甘味を感じさせる調味料のたぐいは除外されている。

提喩とは何かを明らかにする上で，提喩を，換喩の下位カテゴリーとみなすかどうかがしばしば問題になる (Zhang 2016: 18–20)。典型的な換喩の用例は，有段者を「黒帯」，陶器を「九谷」と呼ぶような表現 (佐藤 1978: 121) であり，ここに共通するのは，ある存在の代わりにそれと何らかの近接性 (contiguity) をもつ他の存在に言及している点である。この「何らかの近接性」の中には，部分全体の関係が含まれるという点で多くの論者が一致しており (e.g. 佐藤 1978; Lakoff & Johnson 1980; Seto 1999; Peirsman & Geeraerts 2006)，(2) のような部分全体の提喩は，換喩に含まれると考えられている。しかし，(3) のような類種の提喩が，換喩に含まれるかどうかという点では意見が分かれている。

一方では，類種の提喩は，換喩とは独立した別のレトリックとみなすべきであるとする説がある (佐藤 1978: 138–175; 籾山 1998: 71–75; Seto 1999)。佐藤 (1978) の主張を受け，この説を最も尖鋭に打ち出している Seto (1999: 91–92) は，現実世界におけるある存在 (entity) と別の存在の間の時空間的な近接関係を基盤とする指示的転移である換喩とは異なり，提喩は，より広いカテゴリー (category) とより狭いカテゴリーの間の意味的な包摂を基盤とする概念的転移であり，類種の提喩は換喩から完全に独立していると述べている。

他方では，類種の提喩と，換喩の境界線は明確ではないとする説がある (Radden & Kövecses 1999: 34–35; 谷口 2003: 124–126; Peirsman & Geeraerts 2006: 301–308)。Radden and Kövecses (1999: 34) は，提喩を特徴づけるのは類種の関係であると述べつつ，カテゴリー階層の構造は，比喩的 (metaphorically) に部分全体構造として概念化される場合があるため，両者を明確に区分することは難しいと主張しており，類種の提喩は換喩の下位カテゴリーとみなされている。

2つの仮説の妥当性を比較するためには，言語的，認知的な実証的研究が別途必要になると思われる。上記の論争に関連して，本論文の目的に関連して強調すべきことは，類種の提喩は，カテゴリー化の能力という言語の基盤となる認知能力の中枢に関係しており，提喩の中でも，類種の提喩にはつねに中心的関心が向けられてきたという事実である。以上の点を踏まえ，本論文では，(3) のような類種の提喩を考察対象とし，その中でも特に類の提喩に焦点を当ててその機能のメカニズムを考察していく。

3. 提喩の修辞性

類の提喩は，種の提喩とは異なる意味的特性をもつ。種の提喩は，隠喩と同じく，文字通りの意味で解釈すると矛盾する（e.g. “わらび” 餅は片栗粉で作ることはできない）ことが修辞的効果をもつ条件になっている。他方，類の提喩では，文字通りの意味で解釈しても矛盾はしない。例えば，「甘いもの」には甘いお菓子が含まれるという意味では，(3b) は文字通りの意味で理解できる。

ではなぜ，類の提喩は修辞的効果をもつのだろうか。鍵となるのは，表現の抽象度である。トマトを「トマト」と表現する（4）と，「赤いもの」と表現する（5）を比較すると，(5) には，提喩の修辞性（i.e. 修辞的効果が生まれるきっかけとなる，慣用的な用法からの逸脱の度合い）が明瞭に感じられる。素朴な観察として，(5) の修辞的効果は，慣習的な基準よりも表現の抽象度の高さが際立っているということに起因しているように見える。

(4) トマト祭りにきたはずが，トマトが全く画面に映っていない。

(5) トマト祭りにきたはずが，赤いものが全く画面に映らないという奇跡。トマトをぶつけあうはずが，終わってみれば 1 時間のおしくらまんじゅう大会。トマトにまみれた会場はわずか 1 時間で洗い流され，楽しみはまた来年。(「Q. 世界で一番盛り上がるのは何祭り？～スペイントマト祭り～」『世界の果てまでイッテＱ！』)

より具体的には，類の提喩の修辞性は，どのような条件の下で高くなるのだろうか。以下では，(i) 抽象度の高さの “基準” とは何かという問題と，(ii) 抽象度が “際立っている” ことをどのように評価するかという問題を，順に考察していく。

第 1 に，提喩の特性は，基本レベルで表現するものをわざとぼかして表現する点にある（森 1998: 52)。抽象度の基準を考察する上では，基本レベルカテゴリー（basic level category）の考え方が重要になる。基本レベルカテゴリーとは，機能的にも認識的にも優先度の高い物事の分類であり，ゲシュタルト知覚・イメージ形成が簡単で，学習・記憶・想起が容易であり，言語化がしやすい等の特性をもつ（Lakoff 1987: 13)。最後の特性は，特に重要である。例えば（6a）に示されるように，トマトは典型的には「トマト」という語によって言及される存在であり，特に必要がなければ「桃太郎」のようなトマトの特定品種を表す下位レベルの分類に言及されることは少なく，また「赤いもの」のように上位レベルの抽象的存在として言及されることも少ない。

ただし厳密には，上位レベルまたは下位レベルの表現の適切性はコンテクストによって変動する。(6b) のように，大まかな視覚的特徴だけが問題となる場合には，上位レベルの表現も適切であり，(6c) のように，特定のフレーム知識（e.g. 園芸のフレーム）が喚起

されるようなコンテクストでは，下位レベルの表現も自然になる。

(6) a.　子どもが {?赤いもの／トマト／?桃太郎} をちぎって喜んでいる。
　　b.　ふと見ると，{赤いもの／トマト／?桃太郎} が目にとまった。
　　c.　{?赤いもの／トマト／桃太郎} は初心者でも安心して育てられます。

注目すべき点は，「トマト」という基本レベルの表現が（6）の全ての場合に適切であることである。言語使用のコンテクストに依拠せず用いることができるという点で，カテゴリー化の基本レベルは，表現の抽象度の認知的基準となっていると考えることができる。

第2に，表現の抽象度の際立ちを調べるためには，何らかの評価方法が必要になる。上下関係（hyponymy）を判定する語彙意味論の手法は，本論文の問題に応用することができる。上下関係とは，より特定的な語彙項目とより一般的な語彙項目との間に成り立つ範列的関係を言う（Lyons 1977: 291）。例えば apple と fruit は上下関係にあり，このとき apple を下位語，fruit を上位語と呼ぶ。X が下位語，Y が上位語を表す典型的な表現であるならば，(i) *Xs are my favorite Ys*（e.g. *Apples are my favorite fruit*），(ii) *Xs and other Ys*（e.g. *apples and other fruit*），(iii) *Is it a Y? —Yes, it's a X*（e.g. *Is it a fruit? —Yes, it's an apple*）等の構文が適切に用いられることが知られている（Cruse 2004: 148–149; Croft & Cruse 2004: 141–142）。対偶を取れば，(i) から (iii) のような構文を用いることが適切でないならば，X と Y は典型的な上下関係にはないと言える。

したがって，(7)(8)(9) の適切性のちがいは，［野菜］（以下，角括弧は概念を示す）とは異なり，［赤いもの］は［トマト］の典型的な上位概念ではないことを示していると言える。[2]

(7) a.　トマトは私の大好きな野菜です。
　　b. ?トマトは私の大好きな赤いものです。
(8) a.　トマトと他の野菜
　　b. ?トマトと他の赤いもの
(9) a.　それ野菜？—うん，トマト。
　　b. ?それ赤いもの？—うん，トマト。

(7)(8)(9) の適切性のちがいは，ともに［トマト］の上位カテゴリーである［野菜］と［赤いもの］に反映されたカテゴリー化が，質的に異なることも示している。一般に，ある存在がどの上位カテゴリーの成員とみなされるかは，どのような関心から分類をするか

[2] 上下関係は厳密には，“語”の間に成り立つ意味関係である。しかし，上下関係の判定法は，「野菜」のような語であれ，「赤いもの」のような句であれ，類種関係全般の判定に自然に拡張できる。

によって異なる（e.g. 植物＞野菜＞トマト，色のあるもの＞赤いもの＞トマト，変化するもの＞傷むもの＞トマト，等）。Croft and Cruse（2004: 149）は，このカテゴリー化の着眼点を「関心の焦点（focal orientation）」と呼んでいる。（7b）の不適切性の一因には，色という観点から分類して好みを述べることが非慣習的であるという点が挙げられる。[3] 抽象度の際立ちに，関心の焦点の非慣習性が関わっていることは（8b）からも示される。より直接的な証拠として，（9b）は，色に着目したカテゴリー化が可能かどうか（i.e. その色であるかどうか）を問うこと自体が自然ではないことを示唆している。[4]

以上から，（5）のような，典型的な類の提喩では，カテゴリー化の基本レベルを基準として，非慣習的な関心の焦点を置いた上位レベルの言語表現を用いることから修辞性が生じていると言える。

4.　提喩の認知図式

3 節では，典型的な類の提喩が修辞的効果をもつための条件を考察した。しかし，この条件からは，提喩が生み出す効果の具体的な内実が予測されるわけではない。本節では，認知文法のフレームワークを背景として，修辞的効果のより直接的な基盤になる，提喩の意味を考察する。Langacker（2008）は，言語表現の意味は「概念化（conceptualization）」（*ibid*., 30）であり，「意味は，概念の内容（content）とその内容の捉え方（construal）の特定の方法とからなる」（*ibid*., 43）と述べている。本節では，提喩の意味のうち，捉え方の側面に注目する。以下ではまず，（i）基本レベルと上位レベルの表現に反映された概念化を比較し，次に（ii）類の提喩の捉え方の図式を考察する。

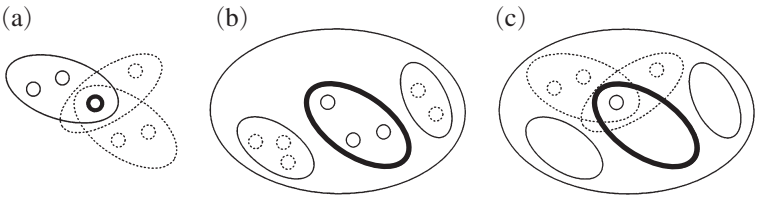

図 1　基本レベルのカテゴリー化と類の提喩

まず第 1 に，基本レベルの表現と上位レベルの表現の，具体的な意味のちがいを分析しよう。図 1（a）は（6a）の「トマト」のような，基本レベルのカテゴリー化を示してい

[3] 大規模日本語 Web コーパス jpTenTen11 における語形の生起頻度は，「好きな野菜」は 920 件であったのに対して，「好きな赤いもの」は 0 件であった（2017 年 12 月）。

[4] 例えば色覚異常によって赤色と緑色の区別がつきにくいなど，色がすぐに分からず，関心の焦点になる場合には（9b）の問答は自然になる。

る。円は種概念を示し，円を囲む楕円は類概念を示す。太線は指示対象（designated entity）として概念内容が前景化されていることを示している。例えば「トマト」という語はデフォルト的に，［野菜］（＝実線の楕円）の概念を背景に，［トマト］（＝太線の円）を指示対象として前景化する。［野菜］の一種として［トマト］を位置づける場合，たいてい［キュウリ］［ナス］（＝細い実線の円）等の他の野菜との対比が喚起される。潜在的には，［赤いもの］［傷むもの］（＝点線の楕円）といった［トマト］に関する他の類概念も関係する。点線は概念化における際立ちが低いことを示している。

図1（b）は，（6b）における「赤いもの」のような，上位レベル表現の意味を，図1（a）との比較で示している。（6b）の「赤いもの」は，「目にとまった」ものが，［トマト］［血］［ポスト］などといったように，具体的には何であったか特定されていないことを表現している。ここでは，複数の種概念を含む類概念である［赤いもの］（＝太線の楕円）自体が指示対象として前景化されている。この漠然とした捉え方においては，［白いもの］［青いもの］（＝小さな楕円）など，他の色概念との対比が喚起される。外側の大きな楕円は，対比の基盤になる，［色のあるもの］のようなより上位の概念を示している。

第2に，（5）を例にとって，類の提喩の意味（図1（c））を考察しよう。（5）では，「赤いもの」という表現が用いられている。図1（c）の太線の楕円は，［赤いもの］が言語化されているという点で，図1（b）と同様に前景化されていることを示している。しかし（5）の「赤いもの」は［トマト］だけを指しており，（6b）とは異なり，他の［赤いもの］は問題にされていない。本論文では，以下，類の提喩がコンテクストの中で実質的に指示するものを，提喩のターゲットと呼ぶ。図1（c）において，太線の楕円の内部に円が1つしか描かれていないことは，［血］や［ポスト］など他の成員が意味解釈に関与しておらず，提喩のターゲットにはなり得ないことを表している。

また図1（a）の場合と異なり，類の提喩では，提喩のターゲットと，その基本レベルカテゴリーの他の成員（e.g.［キュウリ］［ナス］）との対比は背景化される。その一方で，より上位レベルのカテゴリーの成員（e.g.［白いもの］［青いもの］）との対比は前景化される。このことは，次の言語的振る舞いからも示される。

（10）a.　マルゲリータピザは，緑のものと赤いもののコントラストが鮮やか。
　　b. ?マルゲリータピザは，バジルと赤いもののコントラストが鮮やか。
　　c.　マルゲリータピザは，バジルとトマトのコントラストが鮮やか。

（10a）は，典型的なマルゲリータピザのレシピを想定した場合には，バジルにあたる「緑のもの」に対して，「赤いもの」がトマトの赤い色を際立たせる表現として理解できる。言い換えると，（10a）における「赤いもの」には，ターゲットが何であるかを特定する機能だけではなく，ターゲットのある側面を前景化するという機能も備わっている。（11a）のコンテクストでは，「赤いもの」がトマトを提喩的に表すことは明らかであるが，この

場合の「赤いもの」は他の野菜の種との対比でトマトを捉えているわけではない。仮に（10a）の「赤いもの」が，トマトを野菜の一種として前景化して捉える表現であるとすれば，「バジル」のような他の種と同じカテゴリーの成員として並立する，（10c）のような表現が適切になるはずである。しかし（10b）が示しているように，実際には「バジル」と「赤いもの」の並立は不自然である。したがって，（10a）の「赤いもの」は，種の対比ではなく，色の対比のみを前景化していると言える。[5]

以上の考察から，類の提喩に内在する概念化の特性は，次の 3 点に要約される。この特性は捉え方（e.g. 前景化／背景化）のパターンであり，基本的には，概念内容によらず，類の提喩全体に共通する図式になる。

（S）〈類の提喩の図式的特性〉

（S–1） 提喩が文字通りに表す，上位レベルの類概念に含まれる種概念（e.g.［トマト］［ポスト］［血］）の間の対比は背景化される。

（S–2） 提喩のターゲットを含むカテゴリーとして，典型的に喚起される類概念のうちに含まれる，種概念（e.g.［トマト］［ナス］［バジル］）の間の対比は背景化される。

（S–3） 提喩が文字通りに表す上位レベルの類概念を，さらに包接するカテゴリーとして喚起される，より上位の類概念に含まれる種概念（e.g.［赤いもの］［白いもの］［青いもの］）の間の対比は前景化される。

5. 提喩が生み出す修辞的効果の体系

4 節では，提喩に反映された概念化を考察した。図 1（c）のような捉え方の図式は，全ての類の提喩に共通する概念化のパターンである。その一方で，提喩が関与する概念内容は多様であり，コンテクストによって，提喩はさまざまな修辞的効果を生み出す。

本論文では，修辞的効果には図式の特性が反映されていると考える。鍵となるのは，提喩の図式が，個別事例におけるコンテクストの中でどのように具体化されているのかを明らかにすることである。以下では，コンテクストの条件によって，修辞的効果がどのように変化するかを記述する。5.1 節で提喩の効果の多様性を概観した後，知識状態（5.2 節），際立ち（5.3 節），婉曲性（5.4 節）に関するコンテクストの条件に着目して，提喩の修辞

[5]「バジル」は典型的な野菜とは言えないが，食用に栽培される植物であるという点で，少なくとも拡張例としては野菜に含まれる。（11c）が示すように，「トマト」と「バジル」は同質のものとして並立可能であり，［バジル］が野菜の典型的な成員ではないということはここでの議論には影響しない。

的効果のちがいを記述する。

5.1.　修辞的効果の多様性

類の提喩は，事例によってさまざまな機能を担うことが指摘されている。Mori（2006: 561）は，類の提喩は，ある存在の 1 つの性質を際立たせ，他の性質を背景化する修辞的効果を生み出すと述べている。この記述に適合する例として，例えば（5）の「赤いもの」は，トマトを視覚的特徴にもとづいて印象深く伝える効果をもつ。類似の記述として，佐藤（1978: 159）は「白いもの」で雪を表す提喩を論じながら，この提喩は「雪のもつさまざまの特性のなかで特に白さにだけ集中的に照明をあてている」と述べている。

類の提喩の機能は，特定の性質を際立たせるだけではない。野内（2000: 31–32）は，「日本酒を飲む」ことを単に「飲む」と表現する例を挙げながら，分かりきった対象を特定することを避ける経済的な言語方略としての機能を提喩が担うことを指摘している。

これらの観点とは異なり，中村（1991: 298–300）は，猫を表す「白い哀れな生きもの」という例を挙げて，すぐには猫とは特定できないような叙述が漠然とした雰囲気を強める手段になっていると述べている。これに関連した考察として，野内（2000: 32–33）は，提喩はあえて特定化しないことによって聞き手の想像力をかきたてる余情性を生み出すことがあり，この余情性は婉曲の効果に通じるとしている。大森（1988）は，提喩は語から喚起される人間の感情を表す効果があると述べている。これに関連する例として，本論文の冒頭で挙げた（1）の「男」は，その人物への無関心の態度をほのめかす効果をもつ。

以上のように，類の提喩は多様な修辞的効果を生み出す。しかしこれまでの研究では断片的に記述がなされているのみで，効果の多様性がなぜ生まれ，互いにどのように関係づけられるのかは明らかではない。本節では，提喩の図式を共通基盤として，複数の効果を体系的に（i.e. 個々のものを統一的に関係づけて）記述することを試みる。

5.2.　知識状態──情報的条件

まず，類の提喩は，提喩のターゲットが未知の存在であることを受け手（i.e. 聞き手／読み手）に示すために抽象的な言い回しを選んでいるものと，既知であるにもかかわらずあえて抽象的な表現を用いるものとに分けられる。未知であることを示す提喩の機能は，これまでの研究では注目されていないが，文学テクストの中で登場人物の知識状態を示す技法として類の提喩が用いられている例は数多く観察される。[6] 例えば（11）の「白い球状

[6] ここでの論点に関連する研究として，鳶野（2014）が挙げられる。鳶野は，際だった一部分を言語化することによって名もなき登場人物を描写する表現を論じながら，この種の描写が用いられるのは，名前がないゆえに名前で呼ぶことができず，知覚的に際立った一部分で人物全体を表さざるを得ないためであると述べている。

の金属」という色と形状に着目した表現は，「ぼく」が異様な物音によって顔を上げた瞬間，最初「やかん」が何であるかを理解できなかったことを暗示する効果をもつ。(11) は登場人物の知識状態の変化を示唆しているのに対して，(12) は登場人物間の知識状態のギャップを示している。ここでの「青年紳士」という表現は「若い女たち」にとって「津村」が未知の人物であることを暗示していると解釈できる。

(11)　と，異様な物音が，ぼくのすぐわきで起り，それが実になんとも形容しがたい音なので，ぎょっとして顔を上げると，白い球状の金属が上に向いた管状の口から白い蒸気をはき，激しく身をふるわせているのでした。それは電熱器にかけたやかんで，いつのまにかぼくはまた部屋にいるのでした。

（安部公房『壁』: 82）

(12)　坂を登って行く津村は，それらの丘の上の家々から若い女たちがちょっと仕事の手を休めて，この辺に見馴れない都会風の青年紳士が上って来るのを，珍しそうに見おろしているのに気づいた。　（谷崎潤一郎「吉野葛」: 271–272）

未知性の効果は，類の提喩の図式を基盤としている。すなわち，既知であればなされるはずの基本レベルのカテゴリー化（e.g.［やかん］）は背景化される。これに対して，より抽象的な上位レベルのカテゴリー化は前景化される。前景化される上位レベルと，背景化される基本レベルの抽象度の差は，ここでは前景化される未知状態と，背景化される既知状態の知識状態の差として具体化されていると解釈できる。

(13)　病院付の牧師サルのテオへの手紙から推察すれば，自分の耳を切って女への贈物としたこの不思議な絵かきは，町中の好奇の的となり，退院して家に還って来ると，人々は「黄色い家」という檻に入れられた奇妙な動物を見物しに毎日集った。　（小林秀雄「ゴッホの手紙」: 119）

(14)　父親を悪い女に奪(と)られたと，死んだ母親は暇さえあれば，娘に言い聴かせていたのだ。蝶子が無理にとせがむので一, 二度「サロン蝶柳」へセーラー服の姿を現わしたが，にこりともしなかった。蝶子はおかしいほど機嫌とって，「英語たらいうもんむつかしおまっしゃろな」女学生は鼻で笑うのだった。

（織田作之助「夫婦善哉」: 53）

これに対して，既知の存在にあえて抽象的な表現を用いる場合もある。(13) では，「奇妙な動物」が「絵かき」(i.e. ゴッホ）であることは明らかである。また（14）では，単に「女学生」として言及されている人物は「蝶子」の「娘」であり，既知の登場人物である。この 2 つの例は，ターゲットの未知性を示してはいないという点で，(11)（12）とは異なる効果をもつ。

ただし，既知である場合は，ターゲットが既知であることを示すということが提喩の効

果になるというわけではない。(13) と (14) を比較すると，(13) の「奇妙な動物」という表現は，ゴッホの動物的な側面（e.g. 行動が理性的でない）を際立たせている。これに対して (14) では，「女学生」という呼び方は，女学生らしさを際立たせるわけではなく，疎遠な親子関係をほのめかす効果を生み出している。次節では，既知の条件を満たす提喩を，機能上さらに2つに分けるコンテクストの条件，すなわち際立ちの条件について論じる。

5.3. 際立ち—認知的条件

ターゲットとなる存在の特定の側面を際立たせることを目的としているかどうかは，意味伝達の上での重要な区分になる。典型的な類の提喩の特性の1つは，カテゴリー化における関心の焦点が非慣習的であるという点にある（3節）。このことは，類の提喩の多くが，コンテクストに依存した特別な関心によって動機づけられていることを示唆している（cf. 佐藤 1978: 159）。独創的な着眼点にもとづく類の提喩は，しばしば既知の存在に対して新たな意味づけを与える効果をもつ。

本論文で考察してきた (5) の「赤いもの」の提喩は，トマトをぶつけあうことで町中がトマトまみれになる祭りの情景を，色の面から端的に捉える表現であると言える。(13) のゴッホを「奇妙な動物」と呼ぶ描写は，「黄色い家」を「檻」にたとえる比喩との組み合わせによって，ゴッホが町の人々にとっての見世物になっていることを際立たせる効果をもつ。

(15) のように，提喩表現を述部とする分裂文（cleft sentence）にパラフレーズできることは，(13) のような提喩が，ターゲットについての新しい情報と理解を与える機能をもつことを示唆している。

(15)　ゴッホが退院して家に還って来た後，人々が毎日集まって見物したのは「黄色い家」という檻に入れられた奇妙な動物だった。

ターゲットのある側面を際立たせてカテゴリー化するプロセスにもまた，類の提喩の図式が内在している。ここでは，基本レベルカテゴリーの基本的性質は背景化されると同時に，提喩表現が表す上位レベルカテゴリーの成員に共通する特定の性質（e.g. 赤い色）が前景化される。上位レベルと基本レベルのカテゴリー特性の前景／背景の関係は，ターゲットとなる存在の際立つ側面／際立たない側面の関係として具体化されている。

(14) のように，際立ちの効果を目的としていないように見える用例も観察される。(16) の「片仮名」は，専門用語である難解な外来語を意味すると考えられる。[7] しかし，片仮名

[7]「片仮名」は文字通りには表現媒体のタイプを表す。(16) の「片仮名」は外来語を意味する (i) のような定着した換喩（i.e. 表現媒体のタイプで表現を表す換喩）の用法として解釈できる。

(i)　長い片仮名を入れて短い俳句を作るのは難しい。

は日本語における基本的な表現媒体の形式であり，片仮名であることに注目しても，ターゲットになる言葉についての新情報は得られない。厳密に考えれば，片仮名であるということから，その言葉が外来語である，という語種に関する情報は得られると言えるかもしれないが，この情報はターゲットになる具体的な言葉についての新しい理解を与えるわけではない。このことは（17b）のように，提喩表現を焦点とした分裂文へのパラフレーズが不自然であることからも示唆される。同様に，（17a）が不自然であることは，（14）がターゲットの特定の側面を際立たせる機能をもたないことを示している。

（16） 赤シャツは時々『帝国文学』とかいう真赤な雑誌を学校へ持って来てありがたそうに読んでいる。が聞いて見たら，赤シャツの片仮名はみんなあの雑誌から出るんだそうだ。（夏目漱石『坊っちゃん』: 51）

（17） a. ?おかしいほど機嫌をとる蝶子を鼻で笑うのは，女学生だった。
b. ?赤シャツがあの雑誌から出してくるのは片仮名だそうだ。

5.4. 婉曲性―社会的条件

ターゲットを際立たせる効果をもたない用例の中にも，異なるタイプの複数の修辞的効果が観察される。まず第 1 に，文化的あるいは社会的な理由からターゲットになる存在を回避するという目的で「際立たせない」ことを積極的に利用する提喩がある。死，排泄，性など，直接的に言及することがタブー視されている事柄や，身分の高い人に関連する事柄に用いられる，遠回しで抽象的な表現方法は修辞学では婉曲語法（euphemism）と呼ばれているが，例えば，排泄することを「用を足す」，月経を「生理」と表現するなど，類の提喩は婉曲の効果を生み出す手段の一つになる（野内 2000: 33）。（18）の「事実」は妊娠の事実を遠回しに描写しており，（19）の「悪い言葉」は，直前の「首でもくくって」という表現を婉曲的に表現する提喩であると言える。

（18） まさかとは思ったけれども内々気を付けてみるとどうも怪しい，人眼に立つようになってからでは奉公人の口がうるさい（…）深く追求しかねるので腑に落ちないながら一箇月程捨てておくうちに最早や事実を蔽(おお)い隠せぬ迄になった。（谷崎潤一郎『春琴抄』: 33–34）

（19） 全身にまばゆい喝采を浴びたこの幸福な瞬間がなかったとしたら，彼はとうの昔に首でもくくって―いや，これは失礼。極めて小数の人達しか知らない悪い言葉を私はうっかり用いたのである。（坂口安吾「村のひと騒ぎ」: 22）

（16）の「片仮名」は換喩的に外来語一般を表し，さらにこれが特定の外来語を提喩的に表していると解釈できる。したがって厳密には，（16）の用例には，換喩と類の提喩が複合的に関係している。

際立ちの効果は，慣習的なカテゴリー化で背景化されている特別な関心の焦点を反映している。これに対して婉曲語法の用例は，慣習的なカテゴリー化でも喚起されやすい，ありふれた性質（e.g. 悪い）を前景化するという点で，これまで論じた提喩の捉え方とは微妙に異なっている。ここでは，前景化されるありふれた性質と，背景化される特定の性質の関係は，前景化される適正な言葉遣いと，背景化されるタブーの関係として位置づけられる。

第2に，特に言及を避ける理由が無いにもかかわらず，あえて抽象度の高い表現が選択されている（14）（16）には，無関心の態度をほのめかす効果が観察されるという共通点がある。例えば（16）の「片仮名」は，具体的な用語の音形と意味を背景化し，語り手がその言葉の詳細に無関心であることを暗示している。（14）の「女学生」は，娘が「蝶子」に対してあたかも他人であるかのように無関心であることをほのめかす効果をもつと考えられる。

無関心の効果を生み出す提喩は，婉曲の場合と同様に，ありふれた性質を関心の焦点とする上位レベルのカテゴリー化を反映している。両者の主なちがいは，婉曲の場合には文化的ないしは社会的理由から基本レベルを背景化するのに対して，無関心の場合には個人的，心理的理由から基本レベルを背景化するという点にある。

無関心の効果をもつ提喩の用例は高頻度で観察されるわけではないが，本論文のアプローチでは，例外的に見える事例でも，体系的かつ具体的な考察が可能である。提喩が無関心の効果を生み出す条件は，提喩のターゲットとなる存在をTとすると，以下の3点にまとめられる。

（C）〈無関心の効果が生まれる必要条件〉
（C–1）　知識の条件：Tが既知であることが前提されている
（C–2）　際立ちの条件：特徴的なTの性質を際立たせていない
（C–3）　回避の条件：Tの言語化を回避する文化的・社会的な理由が無い

最後に，冒頭で挙げた例を考察しよう。（1）の「木村」は，第1に，作中で詳細に描写されている既知の登場人物である。第2に，「男」という抽象化によって，木村の新たな側面が際立つことはない。第3に，木村という名前を回避する理由はない。以上のコンテクストは，「葉子」の「木村」に対する無関心の態度を暗示する効果を生み出す条件を満たしている。[8]

[8] 誰に対して無関心であるか（i.e. 無関心の矛先）は，語りの視点に密接に関係する。（16）は一人称的な視点からの語りである。一人称的な視点の場合には基本的に，提喩のターゲットに対する無関心が暗示される。これに対して三人称的な視点からの語りでは，例えば（1）のように，提喩のターゲットが無関心の矛先となる場合もあれば，（14）のように，提喩のターゲット（i.e. 蝶子の娘）

6.　結語と展望

表 1　類の提喩の機能体系

- 未知 …… 未知性の効果：(11)(12)
- 既知
  - 際立たせる …… 際立ちの効果：(5)(13)
  - 際立たせない
    - 回避の理由有り …… 婉曲の効果：(18)(19)
    - 回避の理由無し …… 無関心の効果：(1)(14)(16)

本論文では，類の提喩全体に共通する捉え方の図式を明らかにし，コンテクストの条件に着目して，類の提喩から生まれる修辞的効果を記述した。本論文で考察した提喩の修辞的効果の体系は，表 1 に示される。[9]（行末の番号は，代表的な用例に対応している。）

認知言語学のレトリック研究では，概念メタファー理論（e.g. Lakoff and Johnson 1980）を中心に，多数の用例を一般化するパターンを論じるものが多かった。本論文では，このパターンと具体的な使用のコンテクストの相互関係を考察した。修辞的効果は，コンテクストによって異なる。修辞的効果の多様性を，体系的かつ具体的に記述するためには，レトリックの認知的パターンを明らかにすると同時に，そのパターンがコンテクストの中でどのように具体化されているかを詳しく観察する必要がある。コンテクストとして考慮すべき点は，コミュニケーションにおける知識状態や，対話者の文化的・社会的背景にも及ぶ。本論文の考察は，一見すると単純に見える提喩でさえも，その機能を十全に解明するためには，認知，談話，社会といった言語の多面的な特性を考察する必要があることを示唆している。

引用例出典

安部公房『壁』（新潮文庫，改版，東京：新潮社，1988）
有島武郎『或る女』（新潮文庫，東京：新潮社，1995）
織田作之助「夫婦善哉」『夫婦善哉』: 7–56.（新潮文庫，改版，東京：新潮社，2000）
小林秀雄「ゴッホの手紙」『小林秀雄全作品 20』: 11–177.（東京：新潮社，2004）
坂口安吾「村のひと騒ぎ」『坂口安吾』: 21–43.（ちくま日本文学，東京：筑摩書房，2008）

が他の人物（i.e. 蝶子）に対して無関心であることをほのめかす場合もある。

[9] 表 1 の分類は，修辞的効果の“最良”の分類として提案されているわけではない。分類の切り口は，他にもあり得ると思われる。本論文の主旨は，これまで断片的であった修辞的効果の記述を体系的に行うという点にある。表 1 は，多様な修辞的効果が同じ概念化のパターンを反映しており，どのような効果になるかは，コンテクストによって条件づけられているということを示している。

谷崎潤一郎『春琴抄』（新潮文庫，改版，東京：新潮社，1987）
谷崎潤一郎「吉野葛」『谷崎潤一郎』（ちくま日本文学，東京：筑摩書房，2008）
夏目漱石『坊っちゃん』（岩波文庫，改版，東京：岩波書店，1989）
日本テレビ「Q. 世界で一番盛り上がるのは何祭り？～スペイントマト祭り～」『世界の果てまでイッテＱ！』http://www.ntv.co.jp/q/oa/20101010/04.html（2017 年 12 月 16 日）

参考文献

大森文子（1988）.「提喩に関する一考察」*Osaka Literary Review*, 28, 57–68.
小松原哲太（2016）.『レトリックと意味の創造性── 言葉の逸脱と認知言語学──』京都：京都大学学術出版会.
佐藤信夫（1978）.『レトリック感覚』東京：講談社.
谷口一美（2003）.『認知意味論の新展開──メタファーとメトニミー──』東京：研究社.
鳶野記子（2014）.「漱石の修辞技巧──『虞美人草』における提喩の機能──」『歴史文化社会論講座紀要』11: 1–19.
中村明（1991）.『日本語レトリックの体系──文体の中にある表現技法のひろがり──』東京：岩波書店.
野内良三（2000）.『レトリックと認識』東京：日本放送出版協会.
籾山洋介（1998）「換喩（メトニミー）と提喩（シネクドキー）── 諸説の整理・検討──」『名古屋大学日本語・日本文化論集』6: 59–81.
森雄一（1998）.「提喩についての一考察」『明海日本語』4: 49–57.
山泉実（2005）.「シネクドキの認知意味論に向けて── 類によるシネクドキ再考──」山梨正明他（編）『認知言語学論考 No. 4』東京：ひつじ書房, pp. 271–312.
山梨正明（1988）.『比喩と理解』東京：東京大学出版会.
Croft, W., & Cruse, D. A.（2004）. *Cognitive linguistics*. Cambridge: Cambridge University Press.
Cruse, D.A.（2004）. *Meaning in language: An introduction to semantics and pragmatics*（2nd ed.）. Oxford: Oxford University Press.
Lakoff, G.（1987）. *Women, fire and dangerous things: What categories reveal about the mind*. Chicago: University of Chicago Press.
Lakoff, G., & Johnson, M.（1980）. *Metaphors we live by*. Chicago: University of Chicago Press.
Langacker, R. W.（2008）. *Cognitive grammar: A basic introduction*. New York: Oxford University Press.
Lanham, R. A.（1991）. *A handlist of rhetorical terms*（2nd ed.）. Berkeley: University of California Press.
Lyons, J.（1977）. *Semantics*（Vol. 1）. Cambridge: Cambridge University Press.
Mori, Y.（2006）. Synecdoche: Toward a new classification. *The proceedings of the annual meeting of the Japanese Cognitive Linguistics Association*, 6, 561–564.
Nerlich, B.（2010）. Synecdoche: A trope, a whole trope, and nothing but a trope? In A. Burkhardt & B. Nerlich（Eds.）, *Tropical truth(s): The epistemology of metaphor and other tropes*（pp. 297–319）. Berlin: Mouton de Gruyter.

Panther, K., & Radden, G. (Eds.). (1999). *Metonymy in language and thought*. Amsterdam: John Benjamins.

Peirsman, Y., & Geeraerts, D. (2006). Metonymy as a prototypical category. *Cognitive Linguistics*, 17(3), 269–316.

Radden, G., & Kövecses, Z. (1999). Towards a theory of metonymy. In K.-U. Panther & G. Radden (Eds.), *Metonymy in language and thought* (pp. 17–60). Amsterdam: John Benjamins.

Seto, K. (1999). Distinguishing metonymy from synecdoche. In K. Panther & G. Radden (Eds.), *Metonymy in language and thought* (pp. 91–120). Amsterdam: John Benjamins.

Zhang, W. (2016). *Variation in metonymy: Cross-linguistic, historical and lectal perspectives*. Berlin: Mouton de Gruyter.

A Cognitive Approach to Communicative Functions of Synecdoche in Japanese

Tetsuta KOMATSUBARA, *Ritsumeikan University*

Abstract

Figurative expressions manifest our fundamental ability to structure conceptual systems. Synecdoche, a figure of speech by which a general thing is substituted for a specific thing or vice versa, reflects our flexible ability to categorize an entity in different resolution. Recent investigations in cognitive linguistics have demonstrated that synecdoche contributes to conceptual flexibility in categorization. In addition, synecdoche functions as a communicative device to produce various pragmatic effects in different contexts. However, there seems to be few descriptions of the communicative functions of synecdoche in the previous studies. This paper aims to provide detailed descriptions of communicative functions of synecdoche in Japanese from the viewpoint of cognitive linguistics.

We focused on a type of synecdoche, where a general thing stands for a specific thing, and described four types of communicative functions of synecdoche: (i) introducing an unknown entity, (ii) highlighting a property of the target of synecdoche, (iii) implying that direct reference to the target is a taboo, and (iv) indicating someone's indifference to the target. Our basic strategy was to connect a communicative function to a way of construal such as foregrounding and backgrounding. Construal differs depending on the aspect foregrounded in context. We showed that the four types of communicative functions are conditioned by three contextual factors: (i) state of knowledge, (ii) prominence, and (iii) politeness. Our classification of contextual factors enabled us to analyze how different communicative functions relate to each other and to describe them in a systematic way.

Our result implies that we can generally describe communicative functions of figurative expressions in a systematic way by considering how the schematic pattern of construal is elaborated by numerous contexts. This paper indicates that the framework of cognitive linguistics provides an analytic tool to deal with pragmatic aspects of figurative language, as well as its semantic aspects.